

第8節 「阿波岐原」について

はじめに

山崎砂丘遺跡が立地する砂丘には、式内社である江田神社が鎮座し、近辺には伊弉諾尊が禊ぎをしたと伝えられる御池（禊ぎ池）が存在する。まさに、『古事記』にある「日向之橘小門之阿波岐原」を彷彿させる風景である。もちろん、記紀にある神代の記述をそのまま事実と受け止めることはできないが、宮崎県において歴史的記述を行ううえで、これらについて肯定的であれ否定的であれ見解を述べることを避けて通ることはできない。今回のように、神話の舞台と多くの人間が考える土地で発掘調査を行えばなおさらである。ここでは、調査地の住所でもある「阿波岐原」という呼称がいったいどの程度遡りうるのか、その呼称の背景はどういったものなのかを若干検証してみたい。

1 「阿波岐原」の記述

『古事記』『日本書紀』は日本最古の歴史書として知られるが、その史実性、特に「欠史八代」と呼ばれる開化天皇以前の記録については大いに疑問が持たれているのは周知の事実であろう。一方で「阿波岐原」や「櫛」、「小戸」など地名は当地が記紀に著されていることを強く一般に印象づけている。

では、「阿波岐原」の地名が文字資料として現れる最古の例はいつになるのか。

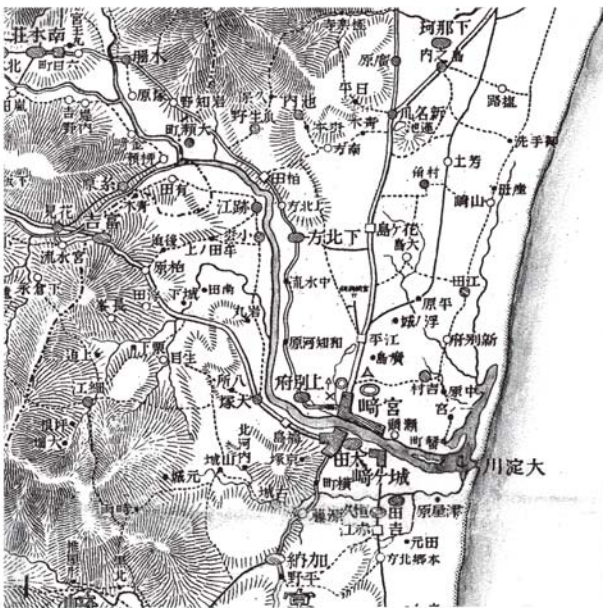
文献で「阿波岐原」が最初にみえるのは言うまでもなく『古事記』である。しかしながら、この名称をそのまま、この地の「阿波岐原」と結びつけることはできない。管見に係った限りで最も遡ることができる地図資料は文政年間に成立した『國郡全圖』にみえる「青木原」の記載であろうか。この文字を「アホキハラ」もしくは「アホキガハラ」と読み「阿波岐原」から転じたものとすれば、少なくとも19世紀の前半までは遡ることができる。また、先述したが、伊東義祐の「飢肥紀行」⁽¹⁾に「アワキカ原」と記されている。「ハ・ホ・ワ・ヲ・オ」などの音が混乱しているという問題はあるが、現状で「阿波岐原」に類する最古の記録は、古事記を除けばこの「飢肥紀行」ということになりそうである。古事記成立より800年以上後の記録が、それ以前からの土地の呼称であったことの証明には何ら成り得ないの言うまでもないが、「飢肥紀行」の別の箇所にも、「全始宮崎入京神武天皇ノ御前近キ所ニテ」（宮崎県史編纂委員会編1999 623項）とあり、この時点で記紀伝承がこの地にかかなり根付いていることを伺わせる。むしろ、記紀の記録が先にあり、それにあわせるようにその後数百年をかけて⁽²⁾地名が付けられていったと考えた方が妥当性は高いだろう。

2 「阿波岐原」周辺の地名表記の変遷

それでは、「阿波岐原」「櫛」など記紀の記載に基づいた記述はどの段階まで遡ることができるだろうか。前述したように「飢肥紀行」では「アワキカ原」とあり漢字表記されていない（宮崎県史編纂委員会編1999 622項）。『國郡全圖』においては「青木原」で、19世紀末に成立した「伊能図」に至っては、発音が類似する記述すらなく、周辺は「江田村」「山崎村」となっている。明治4（1871）年の農商務省地質調査書発行の『宮崎圖幅』（20万分の1）では「江田」はみえるが「櫛」「阿波岐原」の記載はみえない。これは、明治32（1899）年の陸軍陸地測量部発行20万分の1図でも踏襲されている。明治40年に神武大祭を記念して地元の店舗と考えられる松井修進堂から発行された『實測宮崎縣地図』には「櫛」がみえるが「阿波岐原」はない。大正8年の陸軍陸地測量部発行20万分の1図にも「櫛」がみえるが、

「阿波岐原」は確認できない。これらは明治22年の市制町村制施行により周辺が「檍村」となったことに由来すると考えられるが、明治40年の神武大祭を機に記紀にまつわる地名が記載されるに至ったのかもしれない。

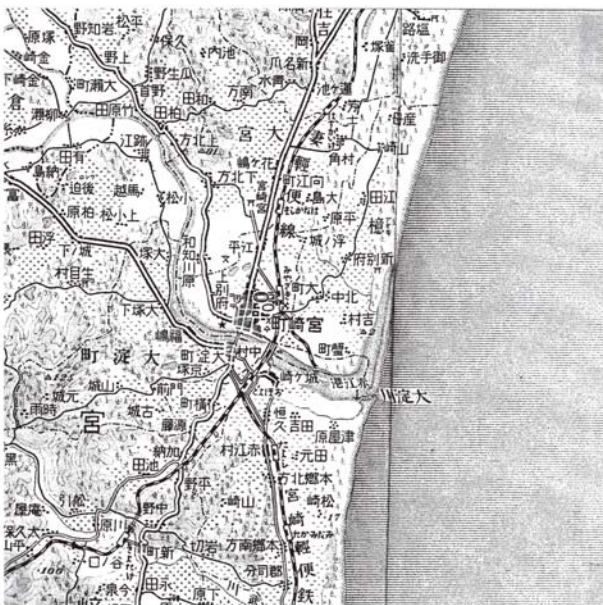
「阿波岐原」の記載を確認するには昭和11（1936）年に陸軍陸地測量部が発行した20万分の1図を待たなくてはならない。この地図では「江田」の記載がなくなっている。これは、檍村が昭和7（1932）年に宮崎市に合併した後、周辺を「阿波岐原町」としたことに由来していると考えられる。偶然であろうが、昭和7年は五・一五事件、昭和11年は二・二六事件が勃発している。この時期が軍国主義を背景とした皇国史観が強く推し薦められている時期であることに注意を向ける必要があるだろう。



昭和22年 20万分の1図



明治35年 5万分の1図



大正2年 20万分の1図



昭和10年 5万分の1図

第162図 地図にみる「阿波岐原」周辺地名の変遷

まとめ

以上のように「阿波岐原」という漢字表記は、軍国主義が台頭していた時期の行政区分に行われた表記であることが確認できた。従来の呼称は、「青木原」という表記で「アホキガハラ」と呼んでいたものではないのだろうか。のちに「ホ」という発音が「ヲ」に「ハ行転呼」し、「飫肥紀行」が記されたとき「ワ」と誤聞されたと考える⁽³⁾のは穿ちすぎだろうか。本来「青木原」というある意味、日本各地にありふれた地名であったとすれば、本居宣長が「阿波岐原」について『古事記伝』の中で「日向に曾て橘の小戸の地名を聞かず」（日高重孝 1952）としているのも首肯しうるのではないだろうか。もちろん、山崎の砂丘のなかにはイザナギノミコトが黄泉の国から帰還した折り褌ぎを行ったと伝えられる「御池」⁽⁴⁾などの記紀にまつわる場所がほかにもあるが、これらについても無批判に記紀が何らかの歴史的事実を反映していることの表れとすることは、少なくとも、科学的検証をしなければならない立場からは逸脱した判断であろう。

【註】

- (1) 永禄5（1562）年に成立。原著にあたることはできていないが、宮崎県史編纂委員会がまとめたこの記事にあたる部分（宮崎県史編纂委員編1999,622項～627項）には「ハヤアワキカ原ノ波間ヨリ」とある。出発の地点が、「那賀」であるか「日州都於郡」であるかはっきりしないが、「那賀」であれば「八声ノ鳥ノ啼ヌ間ニ」馬で出立したにしては、「アワキカ原」で朝日が昇るにはやや早すぎるように感じる。また、わざわざ、海岸沿いに迂回したうで木花などを通過しており山崎街道を使用したことにはやや疑問の残る記述である。いずれにしろ「アワキカ原」との呼称自体は中世末から近世初頭には遡ることができるとはいえよう。
- (2) 現状で、「飫肥紀行」以前に遡ることができる資料がないため、「数百年」と記した。
- (3) 逆に「アハキカハラ」が先にあり、「アハキ」→（ハ行転呼）「アワキ」→（誤聞）「アヲキ」→（音韻変化）「アオキ」と変化したとも考えられなくはないが、「アホキ」→（ハ行転呼）「アヲキ」→（誤聞）「アワキ」と変化したととらえる方が無理がないと判断した。
- (4) 「御池」については、現在、第2、第3砂丘間の低地に存在しているが、第3砂丘の形成時期は15世紀中葉から16世紀中葉と推定されている（甲元真之2012）。また、1498（もしくは1512）年に起こったとされる日向灘沖明応地震や、江田神社を移転させたという外所地震など、明確な記録はないが津波の被害を予想させる災害をこの時期前後に経験していることも見逃せない。したがって、記紀成立時はいうまでもなく「飫肥紀行」成立時期についても現在の「御池」が形成されていたかどうかはおおいに疑問があろう。また、その他の記紀伝承にまつわる名勝の多くが第3砂丘上に位置していることも注意すべきだろう。

【引用・参考文献】

- 甲元真之2009「浜堤の形成と考古資料」『南の縄文・地域文化論考 新東晃一代表還暦記念論文集 上巻』南九州縄文通信No20 南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会
- 甲元真之2012「砂丘遺跡と考古学」『西海考古』第8号 故福田一志追悼論文集刊行事務局
- 日高重孝1952「宮崎地方史」『宮崎県大観』（上巻）宮崎県大観刊行会
- 宮崎県史編纂委員編1999「24 在此入道之道之記之事」『日向記』宮崎県史叢書